

鹿 1 淵に逃げこんだ鹿 = = = 猪・鹿・狸より

鹿を撃った狩人はみなそう言うた。鹿は如何にまっしぐらに遁げてゆく時でも、矢頃を測って、ほーっと一声矢声を掛けると、ふっと肢を緩めて、声の方を振り返ると、その呼吸で引金を引いたそうである。矢声はなるべく短く歯切れのよいのを上乘とした。ぼぼっと、投げつけるように掛けるほど、効力があつたと言う。習性とすれば哀れにもいじらしかつたが、狩人の狙いどころにされたのは情けなかつた。

も一つ、これも鹿に限ってのことで、狩人には都合の好いことだつた。いったん手負いになると、だんだん山を出て、里に近い明るみへ姿を現して来ることである。えらい深山なら知らぬこと、自分らが聞く話は悉くそうだつた。もう三〇年も前になるが、旧正月二日のことだそうである。伊那街道筋の追分である家で朝早く起きて蔀を明けると、そこへ上の方からばたばたと街道を駆けて来たものがあつた。女房がはっと思つて見返した時はもう五、六間先へ駆け抜けていたが、それが鹿で後肢を引き摺つ



蔀（しとみ）
上下に開閉する板
張りの雨戸

ていたそうである。すぐ後ろから犬や狩人が追い掛けていった、後には前夜降つたらしい薄霰がほんのりおいた街道に、紅い血の滴が長く続いていたと言う。



めくら淵（追分）

その鹿はそこから二町ほど下がつた、村端れのめくら淵に飛び込んで殺されたそうである。その淵は街道から覗くと、すぐ目の下に青く澄んで見えた。淵の主は巨きな牛だとも言うて、晴れた日には日光の具合で、時折背中が見えると聞いた。めくら、かいくら、せとが淵などと言うた中の一つで、界限でも名高い伝説の淵だつた。竜宮へ続いているとも言うた。そして昔からよく鹿の追い込まれる

処だつたそうである。

その鹿は、間もなくもと来た道を昇がれていった。何でも朝まだ暗い内、鳳来寺道を五、六町登つた処の、分垂（ぶんだれ）のイノアテで肢を撃たれて、一気に街道を走つて来たのだそうである。その時の狩人の一人の話では、三歳の雄鹿だつたと言う。

子供の頃、村の入りの山から追い出された鹿が、畑を横切って街道へ出て、フナト（船着場）へ続く坂を降つて、最後に飛び込んだ場所もやはり淵だつた。



宮淵（大海）

宮淵と言うて、大海のお宮の森が向う岸に茂っていた。高い岩に囲まれて、川幅五〇間もある物凄い場所だった。もう二十七、八年も前で、その頃は、そこから川下の豊橋まで七里の間、船が通っていた。

手負い鹿が淵に飛び込んだ話は他にも聞いたことがある。出沢の村のフジウの峯から追い出

した時には、鹿が岩の上を走って、鵜の頸（くび）の淵へ飛び込んだと言うた。其の狩人が、八名郡舟着村小川【現、南設楽郡新城町】の、シュッケツの峯で肢を撃った鹿は、峯続きのカマヅルを、ソソデ（ツル嶺を後に反った処）に行くと思われたのが、前の斫り立ったようなタワを転がるように降って、一気に黄楊川の淵に飛び込んだと言うた。

手負い鹿が最後に飛び込んだのは、川沿いの淵ばかりではなかった。山の中にある用水池を目がけた話もあった。自分の家の近くにあった、方が窪の小さな池にも追い込んだことがあったと言うた。大海の村の奥の二つ池は、山の窪に同じような池が二つ並んで、遠くからもその蒼い水が望まれた。やはりその池へも追い込んで殺したことがあったと聞いた。

よく耳にしたことだったが、鹿は手負いになると、きまって池や川に入ると言うた。密林から里近い疎木立（むらこだち）へ出て、畑や街道を走ったのはまだしも、あの青く澄んだ池や淵を目がけたのは、単に偶然ばかりではないように思う。



鵜の頸の淵（大淵）

* 横山話の「竜宮へ行って来た男」を参照して下さい。